語林類葉 い 貳

い 三

ホ 2
502
2

門 2
號 502
巻 2

語林類葉巻之二

清水濱臣輯

いの部

二言

いか 五十日

榮花月宴九○拾遺雑賀 大弐国章 むまこのいかに
続詞花賀
いかにいかゞかぞへやるべき八ちとせのあまりひさしき君がみ世をば
紫日記○源氏柏木御いかにもちひまゐらせ給はん
とて○大鏡巻一延喜条村上天皇誕生五十日の
[illegible]にあたりてまゐりし事あり

宇川保 落窓
いかにしてまどろまれともなれなれておもひの月しらぬまにて袖ぬれし

宇都保 落窓 いかにとらんもはつき日にかへん候ふる ○ 源

宿木 姿のあふ君のいかにかゝふ日のまへとりてそのさとえ

のいさきをとんりいまこて ○ 源ことをつくし ○ 増鏡

うらの雪 若菜 宗ある 法五十日のれしき 中宮 関白殿御かく

まひてくらめまて御川をきふ ○ 同 同 閏七月二日うちにて

法をめ法五十日 きこしめし 中宮 こえくらめまて御つかせまふ

いの 嚴

宇川保 としかけ おそろしうたにいかきとのとも ○

いへ 家 ○ 郎事をいへり 後俗家門といふ意之

宇川保 きさきそ 太大臣の家むつかしきまいりしらはんかうる

へへ ○ 万葉

いろ 倚廬

頭輔集 いろかはらし三月尽のんちを 金葉 雨いゑ暗 かはる五 ○

續古衣傷 詞書 ○ 濱松物語 四 かくるいろのほかい ○ 同 四

いろのほかいえひとつかはりまちまち青み色かはらし ○

三言

いかき　斎垣　○いみかきの略

万葉十一
ちはやふる神のいかきもこえぬへし今は我名のをしけくもなし
拾遺恋四人丸とそ
わか身とあり
六帖社

伊勢物語
ちはやふる神のいかきもこえぬへし大宮人のみまくほしさに
続千恋三　人恋しくは　同

拾遺雑秋
千はやふる神のいかきに雪ふりてえならぬかたにかゝるなりける

いかき　蛛網

万代恋四　実方
きみかめの神のいかきにあへしなと今はをしむへき君はをしけれ
拾遺雑秋　好忠
秋風はすかやかそちそかそのあそかゝせる蛛のいかきを
家集　八月終　○和泉式部集　○実方集

いかけ　沃懸　○射懸

夫木四　家集　仲正
おもしろや風のゆきゝにふかれて夜のしまゆき雪のいかけち

○

いくせ　幾瀬　○いくせのなかれと云も是なり

山家下
みきはちかく引きせて大井川いくせのいのちなからへぬる

○

いけす 生洲 ○簗

袖中一 廿二 又いけすといふ事は池水中編竹籬養魚

也ところ○和名抄

いさをし

四季物語 三月 そのころのいさをしをもつて○

いしき

旨○美味○今俗婦女ノ詞ニ美味ヲ

オイシイトイフコレナリ

いーけ

いーー

いーく

永正五年正月二日任哥合判詞蔵ちらこそのいし

けれる○字川保吹上 中 いしきさう川きれといとめ

一く○神代紀 稚国稚（イニシクニ）（イシキトキ）○盛衰記十七歌ノ音

ノヨサヨイシ、ノト嘆ラレタリ○同 同 イミ

クモウタヘル者カナ

いしみ

散木 君をさそあきのゆふにあなきつむなかわのいしみのしろふかしらん

丈木一同

丈木 仲宮こえし ふきみのなかつゝ色めてゆくさゆきてあらふ絹せうか

四

袖中抄十六　いしうは春なかり

一のさえ
一のとの
一の法師
一の長者

いしむ　窺
埃嚢六　八　不苦非窺○

一の菜 十七
狭衣一上 十六 さふらふかきりの人一のさえをとりのかきりを
しほて○源若菜上 ふるき世の一のものと名のるかきり
いろはつきものはなかるにのこりける
利チトイフ詞音也○イチモチ○今昔廿四 守殿我
孟 天下第一○イチ 名物之
このとのに同じ 下文

サコの国ノ一ノ法師ニハ被用し○盛衰記十
五若宮御出家ノ後ハ安院宮僧正トゾ申ケル
東寺ノ一ノ長者也○源繪合琴こそ世にまたしれん
一のさえにては次にはよこふえ○

いりも　何町ニテモ之
中務内侍日記 いりもといふ○恋の絵上 いりも
ものおもたにるる君

いねせ　歌請 記○いねは否也 語のさいはこの物

万葉
いなもせも

後撰恋五　伊勢　をとこのもとより女をいなともせともいは
なてとやりまうて　いなせともいひはなたれすうきものは
身をこゝろともせぬ世なりけり　○伊勢集同上　○新六
思ひ見つらん○

いなや　否ヤハ助辞
栄花月宴　五十六

いさき　木石

文集　　遊仙

万四　家持
かくはかりこひつゝあらはいなきにもわれはなりなんとおもひをなして

保憲女集
いへとしきもうちのきなきさろかいなきをきたいつる思ひを

いそけ

栄花　かやく後つかうに　いそきのいそけなとかく○源氏若
紫　○同絵合　なにしいそけなる侍ふるゆひあ
らそひさいそ○同若菜上　なあけくまいいそけなるわそい
なえふまにんいまゝなるみちをめあさほれと○空

穂　おほ諒中　開　あらしくかくあくそくいそきなふ○

いはぬ　栗ヲ訓トイヒカケヌ不言ニイヒカク不言ハサリ言ハ

万代雑二　多え　雪のふりきをとらて　小町

○おもきそいはぬの雪も見えしをせふる未もかくふきぼり

いびき　呪　鼻　經文

和名　○源氏　紅　いびきとかやきこゆるかとほしき

い○今昔廿六四　男寝引ノスル方ニ和ラ寄テ

○源角總　いびきかしかなしくいびきもあり　○枕

冊子　みくきよのさるゆうあはうちなる所にかくしるせ

きる人のいびきしたる　○讃岐日記

いひげ　飯器　○常陸河内郡小野ノ辺ニテ飯櫃ノフタヲイヒゲト云ハコノ精之

宇川保　春日説　院の滝いひげ

○

いはい　詞花雑下　花山院

かくしつたえしかなん時にぞえしきいかとのこともかかる

いとぬ

萬葉 五十 月宴 清いさ成清慎公ときこゆ 諡之諱ありいあら 此字ならの寫誤
この巻々におほし ○同花山 廿
皆いまいれにて

いもゐ 江次第 以毛比○イミヲノベテ イモヒト云之斎居ノ 義ニテ イモヒト云ハ謬ナシ
源椎本 いもゐの御いみは雨なる 云々
河 神わきにおもろきもあらゝいへとも人のこゝろは降らもあらぬ事を
隆信集 いもゐさうしにこもりゐしほとに
六帖 もうし 人のいもゐるとき雨てをこ御へしをとし出てこれいくさうし の歌
万代釈教 大台大師忌日 皇慶大僧正 そのかみのいもゐの夜みあ雨きもし葉の菜もいまやこゝろらん
続後拾 釈教

大和物語 なるゐこゝろさしいとゐをなして
夫木卅四 毎日一首中 為家 いもゐるいその事をえてしかほつきんのみなきまいりゐ
夫木卅六 後成 もろもこいづに君をみる人のまいにしんのこゝもなとけつるい
○
いろえ 八雲 彩○色えるる之
竹取 くらくのもりをしきつるをうゑてつくまり ○源若菜下 廿 けはさにも光のこゝのたいろふ ふかひかゝいろえ ○縣居云三部抄 廿 色延 いろはへ の義之文字をはぶへると云 頼之○
言釈

マナカナ
カナマジリ
草ノ手
草カナ
ヤマト文字

いろは 河海十二 梅枝 引江談抄 伊呂波ノ説クハシクアリ

高野日記 いろはの四十八字 うつし 猶可考

壬二下 あめつち歌よみをうけて[illegible] 此のいろはのおりてよう

源 梅枝 なに川の事しるあい[illegible]に書[illegible]

くさのまかなまじり かんなの[illegible] かきはいとしく[illegible]

[illegible]るあまきあるいさ[illegible] あましこころき

[illegible] 一[illegible]にかよひて[illegible]

うきといとかうてこそ書いつる人[illegible] ○狭衣一

下卅 [illegible]書[illegible] ○今昔廿九 四 假名

四 文リニ此ク書タリ ○ 源 絵合 [illegible]のてにうんなの[illegible] 本居説

にあきはせて ○源 少女 [illegible]

はせみなま[illegible] ○源 初子 [illegible]草[illegible]

[illegible] ○撰集抄九 廿九 漢字ヲ所々ニ大和文字を

あそえし[illegible]○

いろは 卅

実方集 [illegible]

[illegible]

[illegible]

堀川百首 春雨

いろも　いろふ○其ころたうくあひ口なと出ルに言之

源　松風　惟光朝臣　まいのもあらあるらちいいかりもかくいろもつうりあけるへかきて○東鑑六　可令停止地頭綺(いろい)

○

いろり　色目

続後拾遺四　近院右大臣　ところるのあさの色めもかはらえは人をあひみてほともへぬまに
万代恋五　近衛右大臣

○大和物語　二句　あかをい　結句　ほとのとそ○

四言

いろあし　筏士
全葉　秋　いさしらきしのところにあかめかなを
有深集一　君か滝代かさてはかるなの面に千とせをさしてあるいろし
うり深参俊　わさき世にかきて流るいさしいろの色かあかれきぬらん

○

いくもと
夫木二　為家　あけさくらるいとこへの小車いく一しほにうほをきぬらし

いく一入
いく一村

新古雑中　西行
志らき野をいて一ひとりにけれてきはむかしと思ひへさん

いさなみ　万八　万十一　辛来（イサナミ）是ハ　読之　万七伊佐佐目糸とある同意也
辛糸をいさめと訓へし　物考　等　得　とし　さと　同挙○

いそなの　海藻にいて　あいあま君へし　あれい必海藻之称して見に
もいふつきろ
十六夜日記　いそなのゆかしきし　いさらつみあつめて
いさつにめかしなやさすがにもなひしやあれし里のあま人

いたかき　板垣

漉蓬生　いなうきといふとめうちかきめつるるなきる
河なきいなかとの事かり

いちもち　逸物○今も又○上文ニあけなる一のとのとち　詞別いちも
ちく一物とかくて逸物ナハあれ
宇川保　春日詣　さる人いまたのも達部上人おほききん
たちなとしめてその中に名あるのきいちもちの物ともなとかく
人○同祭使　○今昔廿五　五逸
物○同廿八　卅七　衣し一物や　並ニ馬ニ○
イへり

い川そや

源氏総角
いつとなく花のあたりにたちならしはめでたき桂いさなうしき

いてきえ
源氏若菜下 何の上ぞめきたふなどはいでたちもあらじい
てきえして○源氏東屋 いてきえいとおとなしうなるに
○

いてたち 発足
十六夜日記 いてたちえんとてあるしたる○

いくいけ 語未詳
竹取中納言 いくいけなる声さしてなむしとなんにき
うせしとしあひはましと 後桜本にはいふけなるとも いふけなるもー

いとをせ 催馬楽譜
もみちのもみちはみな散りてのちはいとをせん
袖中十一 廿四丁 引○

いなおほせ 鳥名也 小町集
秋の田のかりほきなるいなおほせもいねとも人にいはれしをと

万代恋四　小町

余材抄四　こゝ門にいなおほせ鳥の注あり　小町集のいなをまて

いなふねも稲負鳥の一名かといへり○

いなくき　稲茎

散木

隆信集

いなむしろ稲葉をかたてあくるよもかりねのおもひのいなくきのおと

いなしき

堀百　蚊遣火　隆信

いなしきのあそこいふにたくれしかやりひたきてあまつやそふき

堀後百　根田　兼昌

いなしきやそとものたにふかき田のくまぬたゞ根あたにゝ

林葉五　被厭下女恋

いなしきのこやのなまいはえしてされどいふうちわかとあい

為忠家百首　為忠

いなしきやそとものなかの舩きうにちかきはちかけしてかゝりけて

現六　ちかう　藤原隆祐

袖中五

喜撰式云若詠田舎時いなしきのといふ

いなふけ　馬鳴

字鏡　○和名嘶　以奈々久

拾遺恋四　よみ人しらず

なかつゝ道のくろさうまいななきみにさはるものゝいなふけ

いはかけ

栄花 いはかけ 巻名

いはかけの烟をきりにまきれて その中ふくまのさくちせしかは

同 中ふして

むかしのもとをたつらし 君かいはかけの中えの烟とのそふしき

石神 イハカミ

三代紀廿六云貞観十六年九月丙戌朔八日癸

己石見国上言石神二自出雲来是日授従五位

下

金葉恋下 祈不逢恋といへることをよめる 花山院六条

あふことをとかみ神のつまれきにもかんのそらつきぬることの

待賢門院堀河集 同 ○栄花 根合 波のかけともろ川

なてまほしのなのよし左大臣殿まんせいなん御とうちつ

けをなる波のかけあつめてかくてさふらへいさふらふ

みつきとてつ続ふ出来のたる 別物カ コレハ

久安百首 公能

石神のふみをまたんさめくまに山ほとときは鳴やきさの原や

いそんこ 況

伊勢物語 ○宇津保 後京君 いそん

やまとの人は国王と申せともおもむきはかんとや○竹取い

そんこ色川のなひの王はいてさんと申しあへる○

いはゆる　所謂
うつほ　藤原君　なかるあてなそうし○後拾遺序　九條いゝ
いはゆる大中臣よしのふ清原元輔源順紀時文坂上望
城等是也○

いひきる　さしきる　古部
東鑑卅二　二　不可有御延引之旨御切訖○
たゝしかとをいひきるく

いみふく

○五十日
○つきのいみのはて
○又のとしのはて
○正　又四十九日之法事
○わかてらもえらひて
○四十九日
○いはゝも川ゐおもし
　修正は御佛事に
　川きを
○一周のふく
○ふくぬ
○忌月　祥月ノ了
○五七日
○七日七日のはて
○おうおぬ
○ふくやつし
○ちりのさいは三月
○軽服
○三十五日
○十三年

隆信集哀傷　修正範玄のさとなりける五十日まうて○同
五十日のほとりはあるせしける○同つきのとしのはてに佛事せ
しに定家のあそんのもとより　まてもふかきはふ涙てを　返し
名おりみて袖のおもきへつきせぬる　おふ涙てや限と
思ふ袖のおもに杉そせぬは涙なりけり○源氏葵正日ゐて
いるにはあらなまほし　河正日は四十九日之　○正忌日ニテ今イフ又チ　日ヲモ　イヘリ　トナルベシ又一周忌ノ正忌
○隆信集哀傷つきのとしのはてにいふあはりて次
に正日の墓へまうて八日もゆくまたにあまりあまり年おもひしお
きしとしそのふかしくて
涙にかきぬ山路をたとりしに　たゝも杉涙しなかれ　けふのくまふ

山家集下 八オ　又のとしの御はて〇同下十　五十日のはて
川らし〇同下 十三　こかしの見さくて、あとのことも思ひ定
多野へ参りて　訖骨之　〇四十九日　拾遺物名　〇源氏榊 十五
御四十九日過ては〇栄花 月宴 廿七　五の宮は、いつしか川の御はて
しはせは御服など脱ぎたく　于時円融 六年　栄花 月宴 四十九　御はて
としかはりぬ、一月のふしはて〇万代雑四　人の
おやのふくぬぎ侍りたその日のあかりてあまをぬるとて　さとみ
ふち衣ぬぐ人ありて いつかはしたかふを思ひに袖はぬれける
後撰雑二　いとはやしくさとりかへ侍りける所 云云　〇源女女
さらしは故宮の御忌月はてゝ〇小馬命婦集　堀川

の后うせさせ給ひし五七日七月七日にあたりたりければ
〇狭衣二　七日しのはてにはし参りぬ
狭衣四十廿二
夏さしてあつきをはちはしもさらにいとまたつかた
栄花 峯の月　峯の御はて、やつまでありて〇同 衣珠 御
正月は廿三日はてる〇新古今　覚快法親王　かくまで
まて関白のはてに〇千載哀傷　月忌の日　そのそての
に涙かりけるかな〇新勅雑三　八条院かくれさせ給ひて御
正月八月十五夜にあたりけるにあはれなるを　信実朝臣
まことのうちにはかなきのこたにし秋の月かけをかくしけり
源　紅葉　明　御はてをさらへいふ三月とそいふて
河物忌今日祖父祖母父方ハ

暇 卌日服 五月卌ヶい
暇 廿日服 三月 ○澪 幻 法正日にいかでしものくてこれ
いとなしして〔細流云正日いふ之ちかい周忌なといふ〕へて四十九日 ○増鏡 浦千鳥 法门〔後二条〕
いみ法軽服の儀かまして天下も色かへらは〔伏見院崩御〕 ○東鑑
十二 六 法皇三十五日御佛事也 ○王葉 釈 後如卿
十三年佛事に ○東観録云漢明帝營寿陵之詔
過百日唯四時設奠北斎書吴暉傳云毎七日及
百日終吴暉恒為緯請僧設斎北史魏胡太后父
国珍卒詔自始薨至七七皆為設千僧斎令七人
出家百日設万人斎二七人出家○

いやめ
いやしく

卯鑑（たかこ） 卯鑰う
古代雑一 座主辞すとて卯鑑おくり侍りける時よめる

いやし 否
落窪 四 北の方いみじくはらだちのしりをかしく見えさりしを
まはあへる子共しみ人ぞえうず ○唐物語 呂后いやしく
いやしき事にぞおぼしける ○源 うけろふ いやしの
ゆきえもせしとかしこくそかくはしもおぼしけりと ○菜
花 ともたえいし おく山の峯もいとゞいやめにおぼひてまし〔イヤメノ メハ目キ〕
メハツラキメ コヒシキメ カナシキメノヽメクヒ
ニテ イヤメハ イヤナコトイフ意ナリ ○源 早蕨 つきせは

おなじほどなひてあやしき年なれいなは花めに似ん
似たるなまにかひても〇同 夫家 あやしやいき御作る
とみくくそこにえふ〇

いやあし 弥生

尚歯會序 野への草やあひの月

新六 やよい

いさ。一の

字鏡 〇枕冊子

ちゝけき
なそ多ける

堀後百

山家集上 はなさかりのなかのあそひてきいはき[illegible]

同下 六十八 なひ出る河の流雲なそ多つる[illegible]

〇

いらく

長明無名抄上 [illegible]いらか〇源橋姫いとさ
ひけいらつきなるうほつきしてそて弟る 河さしき時多て
いらかをといふ

詩に鶏皮し 〇落 らほ
えり[illegible]

いろごのみ
延喜式　○枕草子　名おそろしきもの　いろごのみ
○同　くちをしきもの　きみにいろごのみおほかりといひさし○

いろめく　気色めく
隆信集　水辺菱草
いろめかん秋ちかくなるさはへし菱のはやかにかはしらん
金葉秋　顕輔
白露やさころおくらん女郎花色めく野への人かよふとて
保憲女集
よしみちたる色めく枝にあまりして木の葉に袖をぬらすらん
○

五言
いきすだま
和名　○枕草子　名おそろしきもの　いきすだま
○遊仙窟　○源氏

いきのした　息下
隆信集恋四　いきのしたにしぬといひて○竹取　ゆきちち
いうかひなくいへば　いきのしたにて○源帚木

いしぶみ　碑

金葉雑上　上略　士にかたりけるを見てたゝみをたゝく

やと女の中よりしい石たゝみをたゝきましてきえやうらやとさきて

皇后宮大弐

ありしにありける事をきゝみに又あらぬ所と思いけるか

散木雑　うへ　俊頼

たかしかる身もきえぬ一しきたゝみに叩きし袖にたまちる旅を

保憲女集　人をしのうき山に入てこのをとうけていしのたゝみに身をとうけて〇二条大弐集に繪巻もしに入るゝ

〇夫木卅二　同

続古神祇　入道前太政大臣

ことわざの神もかゝる山の石たゝみのほかまでも照らいのうら

夫木卅四　涌出品得成寂忘覚轉無上法轉　西行

鷲山の雨にさぞ涼しきをいその鳥みのさそいかたに

〇

いしはじき

空穂祭使　皆女うちよりまいて石はじきしける　彈碁ノ類也

〇和名抄彈碁　今一名指石　始自魏宮文帝於此技巧

好矣〇源氏須磨　あんきのび　万水云　あのせに石はじきしける事也　〇散木

いしなごの石合〇金葉聚〇一条大納言家歌合　石名

取六　番　うれいしなごのかし

夫木集

〇菓苑

新六
山家集
○和訓栞委注○

いそうき、
海人手古良
あせもらにみるまて夜しるしきは君にあふきの風をゑみてし
同　集
多みりしとゆきつふゐの道をとふをてのせめてしいそうしきかれ
検
多みなまてと停いきまへおいぬへきぬきく園子のいそうきけり
いそきぬひ

うちなやき　字鏡
全
萬葉集下
あつさゆらいうて祈ふり停いそきぬひ
いちなやき
大和物語首書可考○大和物語いちなやくいそけ
もとしちらくをにたりて○源氏須子いちなやきとめい
しのそろしう侍りし○同いちなやきなと思ひ奉りて
○源氏椎本のせんいそるやくして○宇治拾遺三十四条
○伊勢物語人いかくいちなやきいそぎをかんしける
○盛衰記十五世ヲトル人ノ子ト云十カラ一
ハヤリ覚エシ○祝詞式　○遊仙窟頭書

いつはとは

万十一 いつはとはあらぬ時とはあらねとも夕かたまけて恋はすへなし

古今秋上 いつはとは時はわかねと秋の夜そ物思ふことのかきりなりける

大和物語 いつはとはわかねとたえて秋の夜そこのわひしさはまさりける

○

いつものや

土佐日記 唯いつものやへかへりてせさふ

いとはなし

源氏若紫 播国のかみの守もはちのむすめうしつきなる

ことにいとはなしかし○同蓬生のうえそ いときなき御けはひや○同

東屋 女君いとはかなくなつかしきおほけなくくみたへのあはれなり

おつけなしいとにうけなまめかしくつきいかしうはぬらしも

さそいとはなき 薫をほめていふ ○同明石 よつまる さなかたむ

くいはき雨をきりて人々あるなきまされ をとこ人の名をほめていふ ○

同ゆるくし あきてまいるをいはしと おほけなし○同野

分 うちあえぬる なをいにこそちさ引おとしてけち

めさせたる いといたし ○ 増鏡 おほかたいたしへのおと

なりまさるかいそいてまさるさきぬるまとはいふたとへてのきみに

○源 玉かつら いふかひなくて流していかに モテハヤサヌコトナリ

いとけなくて

御堂関白集

いとけなくて昔のことやいとみえかりに植ゑし花のをとをしぞ思ふ

栄花 根合 東宮漢しきなふいとけなくて思しめすなふ

いとえしき いとほしきの転也

宇治川深 条院 常はいとえしき女房のなきかほかほし

うれしのみ

いとはかなき

花の色移下 いとはかなしなふ宮かなて候ふほをつくし

とをすへし○

いとみあさき

栄花 ととめしつく いとをあさきのうちにて中をつゝみいれた

○麗景殿女御歌合詞

いそひぬし

神武紀
万代賀

いひあはせ　類句伊部
後拾雑三　藤原国行
いはつたにつゝめる人のうちもあらはいひあはせてもなをいはまほし

詞花

続拾

同

山家下

壬二上

拾玉一

いひつくる　譲○嘱

栄花　○やつ保　かうはかそ　何事をとい
ひ川かんとめをつけてさうへといひつくへきさともかし
譲く　こしい○枕冊子 十四 んなありしをいひつくる人のいひつけ
なるにこしい　嘱く　○万代神祇鳥羽院御附内き事を
ありいひつけられて　ミそ　仁後法師○隆信集下　六十八
はま事をとききこにあやせといひつけあらしん時とし
くり　嘱ノ方ニ○
イヘリ

いきのまつ　云延

隆信集恋五　ゆかし日をいきの松川〇

いへの風　家風

拾遺雑上　菅原の大臣かうふりし侍ける夜母のよみ侍る

久方の月の桂もおるばかり家の風をもふかせてしかな

後拾雑四　後三条院御時

[illegible]への家の風こそうれしけれかゝることのはちりくと思へば

〇山家下　廿三　〇讃岐集　二首

いへえに

六帖　うらみ

いへにいる鶴はあらしの中とわれをきてつらへきか

伊勢物語

いへにありし鶴はも鶴もあはてゝ人きこゆに別れし別れ

新勅恋一　業平朝臣

六帖　具平

いへえにふかしふかしき笛竹のふしふしやまれとこふ人もかな

〇新勅恋五　よそにいふ人もかな　〇源氏　須广

万代恋四　定家

いへえにふかし思へるさ隔と

拾遺恋　草中

〇

今内裏（イマダイリ） スヘテ臨時ニ天子ノオハシマス所ヲ云也
栄花 花山七 堀川のわたりをいまたいりとて 円融院ノオハシマスホトヲイフ
〇枕冊子 所十七 小一条院をいまた内裏とそいふ

六言

いくしめして 五十串の座
隆信集
〇みそき河いくしのしたに風たちて涼しかりける六月の空

いしのほとり
六帖 枕
ことり結の床にまきれる涙をは石の枕もしらすなつらん

戴餅（イタヽキモチ）
古事談 六 安藝守基明曩子之時正月一一之間少納言入道祝言弋学者祖父文章者如父云云
〇栄花 後悔大将 つゐたちれともの中略 きんたちのいたゝきもちれとも〇同 同 きんたちのいたゝきもちせさせたてまつりたまひけるをほとにれらし〇紫日記 下 廿六丁 〇栄花 とり花 十七丁 〇濱松 四 四十一丁 〇同

同 いなつまとのみもいへり○或委玉海○

いなつまかし 徒言

小嶋口号出雲のいなつまをいまだ見ならずして○又

かるいなつまをのみ思ひつけて 雨前とも自家を早下していふ ○拾

遠思草良外 廿ウ おいの後のいなつまをきゝつけて

いなつまふし

拾遺恋三 たゞ人ありし

いかなりし時くものかけのつまにいなつまふせとしらせとかなし

後拾遺恋四 菅原致因

秋の田のかりそめふしもしてけるかいたつらいねを何につまゝし

伊勢集

人待ちて宵ゐはあかさぬいなつまの稲にも秋のつきか ○

いなつま人

いなつまのうち稲 無用者○今云何ノヤリニモタヽヌモノヽ

家なかりきもあかはいなつまのみてふし

万代雑六 源仲正

みしをの○らつ深 ことしつけ

むら人も秋て宮ぬる桑田のいなつまいなかはなれけり

いなたりかく

菜花 月宴 五十六 ○源 松風

秋のいなたりも皆く遠くなる也

てんのこゝろき なるさ海も おのつから山里の家をつくせり

一（イチ）のところ
栄花 花山 十二 関白とのゝ ためきみうちに 申させ給ひけり
さるは世の一の所に おはしませは○

一味（イチミ）の雨（アメ）
後拾遺 釈教
ところもにうるほふ法のしるしこれいちみの雨にやまもなき
○

いつゝのしな
拾玉四 四十九 法花分別功徳品

いつゝの人 五人
後拾遺序

いつゝのむつ
古今長哥 忠岑 つもれるとしをしるせれは いつゝのむつに なりにけり○千長哥 後拾 へにけるとしをかそふれは いつゝのことに

いつゝのことに なりにけり

いつまて人
壬二集下
○あさち原そのゝ志めゆひちきりしもいつまて人をいつまてかまし

みなしこ草 同物カ

いつまてくさ
枕冊子草 いつまて草はまたはかなくあはれなり
きしのぬかよりもこれはくつれやすけなり
同 詠集 九月 覚延法師
秋ふかき人のかきねのきりしにいつまて草の露をみるかも
堀河百 山家 公実
さびしさにいつまて草のいつまてかかきほのつきそめたるの里

○八雲云 いつまて草は壁に生るといへり
現存六帖 入道前摂政
ふる人のすみかのかへにかけつゝいつまておもふ草の名そうき
同 式乾門院御匣
あれてのちすめはいつまて草のいつまてかゝゝる宿のかへにおふらん
壬二集上
くちはてゝあれたる宿のかへにおふるいつまて草のはかなしいつまて
いつまて草かれしよ
新古雑下 皇嘉門院
何とかやかへにおふなる草の名よそれにしてもたくひなき身を
久安百首 堀川
ふるさとのかへにおふる人はいつまて草のいつまてかみん
続古今 雅成親王
うへにおふる草のかれにしいつまて草のいつまてかやとらむ
○

いたいけまし 軽少なること云意也

宇治拾遺 第八 さて母もいたいけましと思ひつゝとゝのへかつ(く)

らんもあまりにせたるとてかへし○

いたはの心ま

曽丹集序 いたはの心はれきまでに○

いぬしときて 未詳

狭衣一下十二 いぬしときてとりもちこにいふいとあやしき

あとなく 犬ヲ時来テノ アヤマリカ○

いほじりゐひ

新猿楽記云 蟷螂(イホヽリ)舞之頭筋○

今様色(イマヤウイロ)

源 末摘 いまやう色のえゆるしかしつやゝかなるあらはしの 花鳥 濃きついきき紅にもあらぬ紅梅にもあらぬその色にて山吹出来る色なりといふ今様色と云大略同じき色と同しき之

○源 玉かつら えび染の御こうちきいまやう色の[illegible]そうまさるとい○同 柏木 あをにびの御衣ともきこうちなる

いまやうかれときさひて ともいふ

何今様色紅之聴色とも今様色

見延書式 紅に似くては聴色

卅

とろ紅に凝る時ハ今様色といふへし水原寿上にあり紅梅ならはさ
く又淡紅ならハうすしと也又出来色ハろ紅染なり

○源 東屋 今様いろのとめ

卯月のいみ
さ月
九月 十月

いむなる月

玉二集下 不逢恋
くらしいむつき月をもこの絶ぬあふきいくらの露にきえなん

山家集上 不尋聞郭公といふことを賢慮社にて人々よみけるに
郭公卯月のいみにかゝふをるを思ひしりても来鳴くなるかな

同上 五月五日くすりあそひあしける年閏月をいむ違きとて人々よみけるに
長月のあまりにつきたちぬるむといふ人のいひやあるらん

同上 我ためにつきなるほとに詣ける尼にやくそくしける事ありけるか三月にいみそきて
かとつるをあまのほとゝきすても猶や卯月のいむへき

万代集二 五月のいみにとをさけける其に此月をあまりとていみつかぬとて 檜垣嫗
人のいむ五月なれとも身にとりてもちこそ侍らん後しらるみち

○宇津保 藤原君 人の忌むなるきさいは ○源 宿木 月をも

いむなるものを見をこし 月をみるは九月にいむといふ事也

うつほ吹上下
かゝる月はいむにつけてもかくさめつらんこそらんかしかくなる

○源 東屋 九十月はいとつらくて 花九月は忌むと有はいとよもいかにあらはにあかる

月なる ○同 同 九月にもありけるをいかゝのこきこえ ○

つし

いまもみつる

源 明石 六 日頃もほのかにみつる風のまきれに ○同 野分 六

ちかうしもいとふさる風なきしと ○ 葉紀 つゝめるもしくし 人し

まぬかれと つき侍れといとふみえてまいり

いろかき人

辻大路ノ説 ツノ訓

いつの則と いつのあたうし

いろにおうは　色好におうはく ○色十キハ無情也

栄花 花山 廿八 ○栄花 月宴 十七 いろえかしく

新古雑上 有能 あかしうきいろかき人の袖をちろちろに月もやとるとのかい

七言

いちまちのせつ　市町之説

落書露顕序 いちまちの説のさとしい○

いつのさとり

法華経云一者不得作梵天二者帝釈三者魔王

四者轉輪聖王五者佛身

雑和釈 尼の戒うけ侍るに 大僧正観修 絵んにうろたえとのはたんらけつまいいつのさとりおりしとそ思ふ

続古釈教 菩薩如来を 知家 ちりはあれいつのさとりあきめてもいりの道をとゆるも見ん

林葉三 於草花供佛 いさをりてあつにそへ見んをとる一もいつのつゆきちると

源 白 玄 いりつの川なうしも捨しろめときと○

いとけのうち　葬礼に死人をの頭をし連ゐえ参り

栄花 月宴 廿六 いとけの清車みそるおて通りる○

いとふにてある

後拾遺二 ちう人かへりに
あさましくいなふたにたつるかへるかいなにしてわかなるひとつき

○拾遺愚草 かきいなふたに ○源常爰 近江の君弘徽殿

の女御への文に 様ならぬ所にもあるまじく思ひ給へていなふ

たにたつるかゝ とぞ ○

河
みくさゐの増田の池のうきぬなはいなふたにたつるよのほとそなる

いなふ出所
未詳 ○契沖云 たつるは延気たちいるなるとを書くし

又言まくをことまくと言ふ ○源早蔵 いなふみつえ

のいなぶるいのちかつくいは ○玉小櫛可尋 ○

いなおほせ鳥

古今秋上 よみ人しらず
わかゝとにいなおほせ鳥のなくなへにけさふく風にかりはきにけり

同秋下 よみ人しらず
山田もる秋のかりほにおくつゆはいなおほせ鳥のなみたなりけり

○菅万 源順 ○和名抄

大和物語 さうし
さよふけていなおほせ鳥のなけるを君かゝたくとおもひけるかな

堀百 田家 仲実
あき田かるかりほのとこにいなおほせ鳥のなくもあはれなり

同 公実
稲くらの稲をいなほれもそをかましいなおほせ鳥そことにぞなる

能宣集 九月いなかの家の絵をうたに かりはてゝそこに稲負へたる女
かりにきてみやこの人はいなおほせ鳥にあはれなるかも

萬葉集 九月田家雨にあきおのみ
かくしてやうきかりつる山田かいなおほせ鳥のうしろめたさに

同
あきの山田よるものゝかなしきといなおほせ鳥をおもしてよ

和泉式部家集
あきくとていなおほせ鳥のなくまはいくとしへぬれるゝさきなし

万代雑三　源順
里とほみくもゐの人の日もおとせす霜かれ冬に霜かよはし
林葉三
夕されは遠の山田をとる秋もいなおほせ鳥になきくらん
万代秋下
○狭衣　いなその風も身にちかしいまそ聞ゆるしきなみに稲負鳥
順集　九月ふたかへりの歌
なかとみふも○袖中十六　十八　廿　廿四・
○玉川の　○余材四　○碎案抄
いなおほせとりかなり

源横笛　そはかとなく聞ゆる笛のねのなつかしきはまさ
なひて○
之をさまなり
遊糸日記
このおきをかよひこなたきはの上にうち（異イ）のおろいは之たさまなり
○
今様（イマヤウ）あなかしこ　うたの体分
長明無名抄下○
し

いしりや女

八言

いなのうのおきなれ

中務日記大嘗會の稲のうのおきなれせん宮女ともいふ

ろくのとのいさしそくのきぬ○同　同上○同いなのうのおき

なとて志ろきろしきけいちきのそと通てあくてそもそ

とせみもやところにそくいみいはさ浪さましらなんてんの中に

いなのうのおきなれさきなる三んなろし君の千とせも稔てきこまて

貞観儀式大嘗會条可考悠紀方ヲハ稲實ト部

ト云乙○主基方ヲハ祢宜ト部ト云フ○

十言

一天下(イツテンガ)のともし火

業苑　かやく多つほ

十一言

いとゆふの御木帳(オホンキテウ)

宇川保　条佳

かくて夕くまにきんなちことをあけていとゆふ

のこきてともなてとさして